

ミクロの世界のワクワク、ドキドキから

副校長 井田善之

「先生、これ見て!」。子どもたちが顕微鏡を覗くようにと私を呼びます。先日行われた6年生の理科の授業の一コマ。言われるがままに顕微鏡を覗くと、そこにはミジンコやヤゴの幼生がはっきりと見えました。ミジンコは体の中が透けていて、心臓が小刻みにリズムよく動いているのが分かります。1ミリメートルにも満たない小さな体の中にも様々な器官があって、それらがしっかりと働いて力強く生きている様子に、私も思わず見入ってしまいました。



顕微鏡のレンズを覗く子どもの目は、驚きやワクワク感に満ちています。「あっ、動いた!」「なにこれ!」などと言いながら、「ねえ、見て見て!」と、周囲の友達に対象を見るように勧めます。勧められた友達も同じように「わあ、すごい!」と驚きを見せると、勧めた本人の目が輝きます。共感し合い、認め合えたような嬉しそうな表情をします。夢中になって対照を見つめ、発見した驚きや喜びを友達と共有する子どもたちの様子に、知識だけではない、何か大切なものが育っているように思います。



6年下山琉夏さん撮影

以前、「自尊感情」の研究しておられる日本ウェルネススポーツ大学の近藤卓氏のお話を伺ったことがあります。自尊感情は二つの領域からなっているそうです。一つは、周囲に褒められたり認められたりすることで高まる「社会的自尊感情」。もう一つは、親の無条件の愛情などで高まる「基本的自尊感情」。社会的自尊感情は、成功体験を積み重ねれば高まり、失敗をすれば低下するような状況に依存した感情です。一方、基本的自尊感情は、成功や優越とは無関係であり、長所も短所も併せもった自分を受け入れ、自分をかけがえのない存在として、丸ごとそのままに認める感情です。この感情こそが、自尊感情を支える大切な感情であるといえます。

感染症や争いによって世界が揺れ、足場の不安定な状況が続く中、揺らぐことのないこの自尊感情がしっかりと育まれることが、特に今、とても大切に思います。

親の無条件の愛情を通して育まれる基本的自尊感情を、学校生活の中でも育むためにはどうすればよいのか。それには「共有体験」(体験の共有と感情の共有)が必要であると近藤氏はおっしゃいます。学校生活で仲間とともに活動を共有し、驚きや喜び、怒りや悲しみなども含め様々な感情を共有する体験を積むことで、基本的自尊感情は厚みを増していくのだそうです。

理科の授業の中で、ミクロの世界に生きる生物の不思議に出会い、驚きやワクワクを仲間とともに味わった体験は、基本的自尊感情を育むための貴重な共有体験になっていることでしょう。普段の授業や行事などの中に共有体験はたくさんあります。中でも、とりわけ自然を対象とした体験は、子どもたちの五感が働き、貴重な共有体験につながるように思います。

先月、2年生や個別支援学級の子どもたちが、地域の植村茂様にお力をお借りし、野菜の苗を植えました。また、5年生は元気村の方々にご指導をいただきながら、田んぼに稲の苗を植えました。草木や土の匂い、暖かさ、冷たさ、柔らかさ、硬さ、肌に触れる風の感覚、鳥や虫の音など、様々な感覚とともに味わい、共感し合う時間は、子どもたちにとってかけがえのない共有体験になっています。

川島小学校の豊かな自然。深い愛情をもって子どもたちを見守り、ご支援くださる地域の方々。自尊感情を育む環境に溢れています。今後も、子どもたちの揺るぎない自尊感情が育まれるよう、恵まれた環境を生かし、驚きやワクワクを大切にしながら、職員一同、教育活動の充実を図ってまいります。今月もどうかご支援、ご協力賜りますようお願い申し上げます。